九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

認知意味論の立場から見る“什么”の各意味間関係

楊，偉健
九州大学大学院地球社会統合科学府

https://doi.org/10.15017/1913910

出版情報：地球社会統合科学研究. 8, pp.103-119, 2018-03-01. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

『地球社会統合科学研究』８号 103～119
Integrated Sciences for Global Society Studies
No.８ , pp. 103～119

認知意味論の立場から見る“什么”の各意味間関係

楊（ヨウ）　偉健（イケン）

従来、“什么”の構文上の特徴について分析した研究が多く見られるが、認知言語学的観点からの分析が不足している。本稿は認知意味論の枠組みを用いて、“什么”について分析を行い、辞書の記述及び先行研究の知見を踏まえたうえで、“什么”の意味分類を再考した。加えて、「中日対訳コーパス」を使用し、具体例を分析することによって、各意味の特徴を図式化することを試み、各意味間の繋がりを考察し意味ネットワークにまとめた。本稿の分析によって、“什么”の意味拡張プロセス及び各意味の関係が、意味ネットワークを通して明瞭に示された。

第１章　序論

１．１ 研究背景

近年、中国語の疑問詞についての研究が盛んに行われている。各言語には様々な疑問詞が存在し、例えば、英語には「5W1H」[1]という疑問詞のグループがあり、中国語も同じように、事物を問う“什么”(「何」)、人を問う“谁”(「誰」)、時間を問う“什么时候”(いつ)、場所を問う“哪里”(どこ)、目的を問う“为什么”(なぜ)と過程を問う“怎么”(どのように)がある。疑問詞には以上６つの単語のほかに様々な疑問詞があるが基本的な疑問詞はこの６つである。中国語の辞書『現代漢語辞典』においては、この６つの疑問詞の意味は以下のように定義されている。

“什么”(何)“①疑問②虚指[2]③任指[3]④驚き⑤非難⑥否定⑦列挙”

“谁”(誰)　“①人を問う②(反語において)否定を表す③虚指④任指”

“哪里”(どこ)“①場所を問う②‘泛指’[4]③(反語において)否定を表す”

“为什么”(なぜ)“原因あるいは目的を問う”

“怎么”(どのように)“①性質、状況、方式、原因などを問う②性質、状況、方式への‘泛指’③ある程度という意味(否定に用いられる)”

以上より、“什么”(何)はこれらの疑問詞の中で意味が最も多く(７つ)存在し、一番複雑なうえに、ほかの疑問詞の意味と重なる点も多いことが分かる。

１．２　研究目的

伝統的には、中国語“什么”の典型的な意味は主に疑問と考えられる。『現代漢語詞典』によると、品詞分類は代名詞で、「疑問」の意味が一番前に書かれている。呂(1984)は、“什么”の意味について「物や人などの名詞の前に置き、事物の性質や人の身分などを尋ねる」と述べており、ゆえに、“什么”の典型的な意味は疑問である。

朱(1982)、呂(1999)、邵(2014)、守屋(1995)、木村(2012)等は“什么”について意味ごとに詳しく分析したが、いずれも箇条書きであり、意味間の関連性について言及したものは少ない。

また、これまでの研究では、「文中の“什么”の後ろに“也”(も)／“都”(すべて)が出ると否定の意味を表す」というような説明があるが、意味についての説明は不十分である。

単語を記憶する際は、各意味を個別に記憶するより、典型的な意味をよく理解した上で、他の意味との関連性を理解した方が効率的であると考えられることから、本論文では、先行研究を踏まえた上で、“什么”の典型的な意味を分析し、その上で、認知意味論の観点から各意味間の関連性を究明し、“什么”の各意味を一つのシステムにまとめることを目的とする。

1　5W1H は大辞林第三版によると、物事を計画的に進める際に、あるいは物事を正確に伝える際に用いられる確認事項で、who（誰が）、what（何を）、when（いつ）、where（どこで）、why（どんな目的で）、how（どのように）という６つの単語から形成している。
2　虚指とは確定できないものを指すことである。
3　任指とはある範囲内の任意のすべてを指すことである。
4　泛指とは特定せずにまとめて指すことである。

第２章　先行研究の概観と本論文の立場

２．１　“什么”の辞書項目

まずは“什么”の辞書における定義を考察する。“什么”の品詞分類は「疑問代名詞」として一つにまとめられ、計７つの語義がある。（以下は、中国語の『現代漢語辞典』を基にして、日本語の訳本『現代漢語辞典』を参照しながら翻訳したものである。）

①疑問を表す。

a 単独で用いられる場合。例えば：这是什么？（これは何ですか？）

b 他の名詞の前に用いられ、人または物事を問う。例えば：什么人（どういう人）　什么事（どういう事）

②「虚指」の意味で、それ自体では、何も指さず、はっきりとしない物事を表す。

例えば：我饿了，想吃点儿什么。（お腹が空いた。何かを食べたい。）

③「任指」の意味で、「何でも」という意味を表す。

A. 文中では“也”（も）あるいは“都”（すべて）と共に用いられ、その範囲内では例外のない事を表す。例えば：只要认真学，什么都能学会。（真面目に学びさえすれば、何でもマスターできる。）

B. 文中に二つの“什么”が前後呼応して用いられ、前者の“什么”によって後者を決定することを表す。例えば：想（考える）什么，说（言う）什么。（思ったことを何でも言う。）

④驚きや不満を表す。

例えば：驚きの場合：什－么！都几点了，飞机还没起飞？（何？こんなに遅いのに、まだ飛んでないの？）

不満の場合：这是什么鞋！一只大一只小的。（何という靴だい、片方が大きくて、片方が小さい。）

⑤非難を表す。

例えば：你笑什么？（君、何を笑っているんだい？）

⑥相手の発言に“什么”をつけて、不同意を表す。

例えば：什么晒一天？晒三天也晒不干！（１日干すだと？３日だって乾かないよ。）

⑦幾つかの並列された項目の後ろに用いられ、列挙しきれないこと、また総括の意味を表す。

例えば：什么自由、平等、不过是为了他们自身。（自由とか平等とかなど、彼ら自身のためでしかない。）

他に、「思い出せないこと、あるいは不確実なことを表す。」とか「同じ名詞の間に“不”をおいた構造の前に置き、無視・無関心な語気を強める」等の意味を書いている辞書もあるが、典型的なものはここで挙げた７つの意味である。

２．２　“什么”の意味分類に関する先行研究

呂叔湘（1978）

“什么”を意味ごとに細かい分析を行った。まず品詞分類により指示詞と代名詞に分け、「疑問」「不定」「否定」「列挙」「驚き」等計10の意味について記述した。

表ｉ　呂淑湘による“什么”の意味分析

呂淑湘（1978）	指示詞：疑問　不明確な事物・人を指す　否定　不定　列挙
	代名詞：疑問　不明確な事物に代えて用いる　否定　不定　感嘆（驚き）

まずは指示詞について具体的な例を挙げる。

①　疑問を表す。

（５）　这　是　什么　地方？　（呂:1985:352）

ここ　は　何　ところ？

ここはどんなところですか？

②　不明確な事物・人を指す。

（６）　你　最近　看过　什么　新片子　没有。　（呂:1985:352）

あなた　近いうちに　見た　何か　新しい映画　ない

最近何か新しい映画を見ましたか？

③　否定を表す。

（7）这　是　什么　玩意儿！　一用　就　坏了！　（呂:1985:352）

これ　は　何　物　ちょっと使った　と　壊れた

この品物はいったいどうなっているんだ、ちょっと使っただけで壊れるなんて。

④　不定を表す。

（8）只要　按　客观规律　办事，什么　困难　都　能　解决。　（呂:1985:353）

さえ　に基づく　客観的法則　やる　何　困難　すべて　できる　解決

客観的法則に基づいてやりさえすれば、どんなこともすべて解決できる。

⑤　列挙に用いる。

（9）什么　花儿呀　草呀，　种了　一　院子。　（呂:1985:353）

何　花とか　草とか　植えた　すべて　庭中

草とか花とかを庭じゅうに植えた。

次に、代名詞の例を見てみる。

①　疑問を表す。

（10）你　买了　些什么？　（呂:1985:353）

君　買った　何（ら）

どんなものを買ったの？

②　不明確な事物に代えて用いる。

（11）我　想吃　点儿　什么。　（呂:1985:354）

私　食べたい　少し　何（か）

何か食べたい。

③　否定を表す。

（12）你　跑　什么，还　有　事儿　和　你　说　呢！　（呂:1985:354）

君　走る　何　まだ　ある　こと　と　君（に）　言う　よ

逃げるな、まだ君に言うことがある。

④　不定を表す。

（13）休息 的　时候，最好　什么　都　不想。　（呂:1985:354）

休憩　の　時　一番いい　何　も　考えない

休憩の時は何も考えないのが一番だ。

⑤　“什么”を単独で用いる。驚きを表す。

（14）什么！　你　已经　五十八岁了，　真　看不出来。　（呂:1985:354）

えっ、　君　もう　58になった　本当に　見えない

えっ、君はもう58になったって、まったくそうは見えないね。

朱徳熙（1982）

“什么”については①イントネーションの影響　②“什么”のあとで“的”（の）をつけるかどうか　③列挙意味　④“周遍性”[5]　⑤名前が分からない或いは言い出せないことを指す意味の５つについて考察した。

まず、イントネーションの影響について、以下の例を挙げた。

（15）他　叫　什么　绊了一跤？　（朱：1982:89）

彼　は　何　つまずいて転んだ

彼は何につまずいて転んだ？

---

5 “周遍性”とは「ある範囲のすべて」の意味である。守屋 (1995) は「任意のすべて」、邵 (2014) は “全指”、王 (2012) は「全称量化」と定義している。

(16) 他　叫　什么　绊了一跤。　(朱：1982:89)
彼　は　何　つまずいて転んだ
彼は何かにつまずいて転んだ。

(15)の文においては“什么”が上昇イントネーションで、疑問を強調している。(16)の文においては、“什么”が軽声で、後ろの“绊了一跤”(つまずいた)のところで音調が下がり、その事実を述べる。

次に、“的”(の)をつけるかどうかという問題については、「“什么”＋“的”＋名詞」の場合には後ろの名詞の所属を聞くことになり、「“什么”＋名詞」の場合にはこの名詞の性質を聞くことになる。

(17)　这　是　什么的　味儿？(药本身的味道还是包装纸的味道)　(朱：1982:89)
これ　は　何の　匂い
これは何の匂いですか？(薬自身の匂いかそれとも包装紙の匂いか)　(拙訳)

(18)　这　是　什么　味儿？(酸味儿还是苦味儿)　(朱：1982:89)
これ　は　何　匂い
これはどういう匂いですか？(酸っぱいか　苦いか)　(拙訳)

また、列挙意味の場合には、並列構造(中国語では“联合结构”)がよく見られる。“什么”はその同位語が属するグループの代表である。

(19)　什么 纸啊、 笔啊, 墨水啊　样样　都　有。　(朱：1982:90)
何　紙や　筆や　インクや　様々　すべて　ある
紙や筆やインクなどすべてある。　(拙訳)

さらに、“周遍性”とは「指示する範囲以内例外がない」という意味である。

(20)　你　爱唱　什么　就　唱　什么。　(朱：1982:93)
あなた　歌いたい　何　それで　歌う　何
あなたが何かを歌いたいのだったら、歌えばいい。

最後に、名前が分からない或いは言い出せないことを指す意味について、以下の例がある。

(21)　一进屋就　嚷　饿得慌, 要先　吃　点　什么。　(朱：1982:94)
部屋に入ると　言う　腹減った　先に　食べる　少し　何
部屋に入ると「腹減った」と言った、先に何かを食べたい(様子である)。

守屋宏則(1995)

疑問代詞全体について考察し、大まかに三つの部分に分けた。一つ目は疑問を表す意味であり、二つ目は不定を表す意味、最後は任意のすべてを表す意味である。

(22)　你　喜欢　<u>什么</u>　音乐？
君　好き　何　音楽
どんな音楽が好きですか？　(疑問意味)(守屋：1995：82)

(23)　同学们　有　<u>什么</u>　问题　吗？
みなさん　ある　何　問題　か
みなさん、何か質問はありますか？　(不定意味)(守屋：1995：85)

(24)　我　不　饿,　<u>什么</u>　也　不想吃。
私　ない　お腹が空く　何　も　食べたくない
お腹がすいていないから何も食べたくない。　(任意のすべてを指す)(守屋：1995：85)

木村英樹(2012)

疑問詞が意味機能上、属性記述か個体指定かについて考察した。その定義とは以下の通りである。

＜事物＞の問いに用いられる“什么”は基本的には日本語の「なに」に対応し、統語上、名詞に準ずる機能を持つ。意味的には、(31)のように典型的な属性記述要求の問いに用いられるほかに、(32)のように特定の集合を対象にした選択的な問いにも用いられる。(木村英樹『中国語文法の意味とかたち―「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究』2012:126)

(25) 甲：“这　是　什么？”
これ　～である　何
これは何ですか？
乙：“这　是　梧桐树　的　果实，叫　胖大海。”
これ　～である　アオギリ　PART　実　呼ぶ　胖大海
これはアオギリの実で、胖大海と言います。　（木村：2012：126）

(26) 水果－中，你　喜欢　什么？
果物－中　あなた　好む　何
果物では何（／どれ）が好き？　（木村：2012：126）

この論文の結論として木村は、“什么”の本来的意味機能は個体指定を求めるものではなく、対象の属性的もしくは概念的な内実の記述を求めるものであり、それによって対象の同定を図ろうとするものであるとしている。

邵敬敏（2014）

特に疑問詞の非疑問意味に着目し、“什么”の非疑問意味を詳しく分析した結果、“什么”の非疑問意味を“全指性”、“例指性”、“承指性”、“借指性”、“虚指性”、“否定性”、“反訣性”と“独用性”に分けている。以下にその具体的な例を挙げた。

① “全指性”の“什么”
“全指性”の“全”とはすべての意味で、“指”とは「指示する」という意味である。

(27) 周围　什么　也　看不见。　（邵：2014:352）
周囲には　何　も　見えない。
周囲には何も見えない。　（拙訳）

② “例指性”の“什么”
“例指性”の“例”とはある範囲の中で一つ或いは幾つかの例を取り出すこと。“指”は指示する意味で、“性”は性質の意味である。“例指性”の意味はある範囲の幾つか（或いは一つ）を取り出し、この範囲のすべてを代表することである。

(28) 小偷儿　什么　的，差不多快　断了根儿。　（邵：2014:355）
泥棒　何　の　そろそろ　終わる
泥棒とかなんて、そろそろいなくなるよ。　（拙訳）

③ “承指性”の“什么”
“承指性”の“承”とは引き継ぐという意味で、同じ文の前半部分の同じ名詞を引き継ぐという意味である。“承指性”とは同一の文の中で、後ろの語彙が前の同じ語彙を引き継いで、同じ意味を指示する性質を持つ。

(29) 什么　树　开　什么　花，什么　藤　结　什么　瓜。　（邵：2014：358）
なに　樹　咲く　何　花　なに　藤　育つ　何　瓜
その樹にはその樹の花が咲く、その藤にはその藤の果実を育つ。　（拙訳）

④ “借指性”の“什么”
“借指性”の“借”とは「借りる」の意味である。“借指性”とは疑問詞を借りて、ある種のメッセージを指示する性質である。

(30) 你　说的　那个　什么　乐园、就是　我们 上回　去的　那个　地儿　吧。　（作例）
君　言った　あの　何　楽園　は　我々　前回　行った　あの　ところ　ね
君が言ったその何とかという楽園は、前回行ったところよね。　（拙訳）

⑤ “虚指性”の“什么”
“虚指性”の“虚”は「具体的ではない」という意味である。“虚指性”とは具体的ではないが、言い出さなくでもそれを代表する対象が明確に分かる性質を持つ。

(31) 今天　小明　第一天　上学，他妈妈　很　担心，生怕　孩子　在　幼儿园　吃　什么　亏。　（作例）
今日　明ちゃん　1日目　通学　彼の母　とても　心配　怖がって　子供　（に）いる　幼稚園　食べる　何　損
今日は明ちゃんの初めての登園日で、お母さんは、幼稚園で何か損（他の子にいじめられる等）をしないかと心配している。
（拙訳）

⑥ 否定性の“什么”

(32)　什么　老字号　啊！　　越老　　越不值钱。　　(邵：2014：364)
　　何　　老舗　(語気詞)　古いほど　　安くなる
　　これが老舗と言える？古いほど価値が低くなっている。　　(拙訳)

⑦　"反訣性"(反問)の"什么"

(33)　嗨！　　一家人　还　　谢　　什么　　呀？　　(相声集)
　(感嘆詞)　　家族　　また　　感謝　　何　　(語気詞)
　そんな！家族なのに、「ありがとう」って言う必要がある(みずくさい)？　　(拙訳)

⑧　独用性の"什么"
　一般的には発話者の感情(驚き、失望)を表す。

(34)　什－么！　　都　　几点　了，　飞机　　还　没　　起飞？　　(作例)
　なーに！(驚き)　すでに　　何時　だった　飛行機　まだ　ない　飛び立つ
　何？(驚き)　こんなに遅いのに、まだ飛んでないの？　　(拙訳)

2.3　中国語疑問詞に関する先行研究

石毓智(2010)

疑問代名詞について、すべての疑問代名詞には①疑問②"周遍性"③不定という三つの意味があり、この三つの意味間に論理的な関係があると指摘した。彼はコーパス調査を通して、疑問詞の疑問的意味の頻度が一番高いことを明らかにし、「疑問」の意味を無標と認定した。比べて他の二つの意味は、必ず何かの語彙／文法手段(標記)を通してしか実現できないため、「有標」と定義した。具体的には、疑問詞が"周遍性"の場合に、a.疑問詞が再び出現する。((10)の例文) b.疑問詞が動詞述語の前に出る。c.肯定の場合に"都"(すべて)をつけ加え、否定の場合に"也"(も)を付け加える。不定意味の場合に、肯定の場合は"有些"(いくつか)"有点儿"(少し)をつけ加え、否定の場合は"不"(ない)あるいは"也"(も)をつける。論理的な関連については、以下の説明がある。

> 疑问代词的基本用法包含两项语义特征：(一) 关系到一定范围内的所有成员；(二) 询问到这些成员的有关方面。然而用作遍指时，实际上要把第二个"询问"义项消除。疑问代词的不定指用法是"遍指"用法的进一步引申。(石毓智《汉语语法》2010：第十三章)

(訳) 疑問代名詞には二つの意味特徴がある。①ある範囲のすべてのメンバーに関わる。②メンバーのある方面への問い。"周遍性"として用いられる時に、②の「問い」という意味を消すことは必要になる。また「不定」は"周遍性"の派生である。

王慶(2012)

王慶(2012)は「量化解釈と疑問解釈」を中心に幾つかの語彙を分析した。その目的は中国語の不定語"谁(ダレ)"の解明である。不定語の意味に関しては、様々な言い方がある。呂(1978)の「虚指(不定指示)」と「任指(任意指示)」は、それぞれHuang(1982)の「negative polarity existential quantifier」と「free-choice universal」に近い。王(2012)は不定語から構成されるα-GICを究明するため(「誰」を代表例として)、量化[6]解釈(存在量化[7]、全称量化[8])と疑問解釈をめぐって議論した。

中国語不定語による「存在量化」は、呂(1978)においては「虚指」であると定義され、朱(1982)においては「知らない、もしくは言えない人、事物、場所、時間を指す」と定義されている。また、中国語不定語による「全称量化」は呂(1978)において「任指(任意指示)」と定義されている。

2.4　"什么"の先行研究のまとめ

呂(1978)、朱(1982)、守屋(1995)、木村(2012)と邵(2014)は"什么"の意味に関して意味ごとに分析した。具体的には以下の表の通りである。

石(2010)は疑問代詞という大きな枠組みから「疑問」、"周遍性"と「不定」という三つの基本的作用の相互関係について分析を行った。石によると、疑問代名詞の典型的な意味は「疑問」であり、ある種の手段で「疑問」の意味の特徴が消され、"周遍性"の意味になると指摘している。また「不定」は"周遍性"から派生した意味であると

6　量化(りょうか、英：Quantification)とは、言語や論理学において、論理式が適用される(または満足される)議論領域の個体の「量」を指定すること。

7　存在量化とは、数理論理学(特に述語倫理)において、少なくとも1つのメンバーが述語の特性や関係を満たすことを表すことである。その記号は通常「∃」と表記され、存在量化子、存在限量子、存在限定子などとも呼ばれる。

8　全称量化とは数理論理学において、ある範囲の「すべての」意味を表すことである。通常「∀」と表記され、「全称量化子」、「全称限量子」、「全称限定子」、「普遍量化子」、「普通限定子」などとも呼ばれる。

表 ii　“什么”の意味分類

学者	“什么”の意味機能
呂淑湘（1978）	指示詞：疑問　不明確な事物・人を指す　否定　不定　列挙 代名詞：疑問　不明確な事物にかえて用いる　否定　不定　感嘆（驚き）
徳熙（1982）	疑問：所属を要求する　性質を要求する 非疑問：列挙　周遍性　名が分からないもの言い出せないことを指す
守屋（1995）	疑問　不定　任意のすべて
木村英樹（2012）	属性への疑問　個体指定
邵敬敏（2014）	全指　例指　承指　借指　虚指　否定　反訣　独用

述べている。

王（2012）は生成文法の角度から、中国語の不定語について、量化解釈（存在量化、全称量化）と疑問解釈をめぐって議論した。

2.5　本論文の立場

以上の先行研究を参照し、中国語の“什么”の意味項目に関して、辞書は７つの意味を、呂（1978）は10の意味を、朱（1982）は５つの意味を列挙していることが明らかになった。だが、各説の中で重複している部分もあれば、異なる部分もあり、どうしてこのような異なる分類法になるのかを解明するには至っていない。この問題を解決するため、“什么”の典型的意味をまとめた上で、意味項目を再定義する必要があると考える。また、“什么”の意味分類に関する研究は、いずれも構文上（“什么”の位置やその前後の助詞）の分析を通し、箇条書きで各種の意味を分析しているにとどまっており、文構成（かたち）上の分析は十分と見られるが、意味上の分析は不十分であると見られる。故に、本論文では認知意味論の立場から、各意味の関連性を分析することを試みる。

本論文では、中国語の小説《红高粱》(『赤い高粱』）と《棋王》(『チャンピオン』)のコーパス資料を用いて、認知言語学の理論を援用し、中国語の“什么”に関して、以下の研究課題を設定して、以下の２つの議論を展開する。

1．“什么”の意味は幾つあるか。
2．各意味間の意味ネットワークはどのようなものであるか。

の２点である。

第３章　理論的背景及びコーパス資料の紹介

３．１　理論的背景

本章では、主に認知意味論の立場から“什么”と「何」について分析を行う。先ず、本論文で用いる主な理論について説明する。

３．１．１　認知意味論（cognitive semantics）

生成文法では人間の言語は有限の「形式」で無限の「意味」内容を表現しうる知的メカニズム（mechanism）であると考えている。19世紀の前半、生成文法の立場から、言語能力解明の鍵は「形式」にあると見て、統語論中心の理論が構築された。しかし、無限の「意味」を有限の形式で表現するためには、「意味」側での分析が不可欠であり、80年代以降、認知意味論や認知文法論が発展してきた。

認知意味論は言語に話し手の事態認知が反映されるという見方をしており、文字通りの意味の研究だけでなく、言語現象の有機性の問題にも焦点を当てている。具体的には言語と認知の関係を中心として研究、多義現象に対する体系的研究、形式と意味の対から構文を捉えた新たな統語論の研究等がある。本論文では、上記の立場に立つ。

３．１．２　意味拡張（semantic extension）

意味拡張とはある種のメカニズム（メタファー、メトニミー、シネクドキー、イメージ･スキーマ等）を通して、基本的な意味から派生的な意味に拡張していくということである。

例えば、「鶏がタマゴを生む」と「彼は医者のタマゴだ」この二つの「タマゴ」の意味は異なる。前者の「タマゴ」は卵の基本的な意味であり、後者の方はこの基本的な意味からメタファーを通して派生した新たな意味という考え方である。

３．１．２．１　メタファー（隠喩;metaphor）

河上（1996）では、「メタファーとは、ある領域の事物を、類似性の連想に基づいて、別の領域の事物に喩えて理解すること。認知言語学では、単なる修辞法にとどまらず、人間の認識の根本にあるメカニズムの一つとして捉えている。」と述べている。松本（2003）では、「２つの事物・概念の何らかの類似性（similarity）に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。」と記述している。河上（1996）は、以下のような例を提示した。

例：お正月休みに食べすぎて、ブタになってしまった。

この文の意味は人がブタになるのではなく、人の体型がブタのように太っていることを表している。人の体型とブタの体型の類似性に基づき、「人」を「ブタ」に例えている。

３．１．２．２　メトニミー（換喩;metonymy）

河上（1996）は、「メトニミーとは、一言でいうと、近接性の連想に基づいて、あるものを別のもので指し示すという知識のプロセス」と述べている。また松本（2003）は、「２つの事物の外界における隣接性、さらに広く２つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。」と述べている。ここでは河上（1996）の例を用いて説明する。

例：黒板を消す。

「消す」の対象は「黒板」ではなく、「黒板に書かれている文字」などである。ゆえに、「黒板に書かれている文字（黒板に隣接している）」を「黒板」で指し示す。

３．１．２．３　シネクドキー（提喩;synecdoche）

松本（2003）は、「より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは、逆により特殊な意味をもつ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩」と述べており、日本語の「花見」という語はシネクドキーの典型的な例であるとしている。「花見」の中で「花」という語はチューリップ、バラ、等の広い範囲の花ではなく、「桜」という特殊な花を指している。ゆえに、「花」という一般的な形式をもつ語を用いて、「桜」という特殊な意味をもつ語を指示する。

３．１．２．４　イメージ・スキーマ（image schema）

河上（1996）は「私たちが身体的、知覚的に繰り返し経験することを、抽象的レベルで構造化したものであり、普遍的な性質を持つ。容器のスキーマなどに代表される。」と述べている。ただ、広義のイメージ・スキーマは感覚像がなんらかの形で抽象化されたものであるとも述べている。以下具体的例の引用である。

> 「今日はヒットを３本飛ばしております。」この文では、ヒットを打つ道具としてのバットの形状は細くて長いので、これがメトニミーに関与しているという可能性がある。もう一つの例文は「バスケットの試合でシュートを３本決めた」。「バスケットのシュート」とはボールが描く軌跡のことで、それが細くて長いので、「本」を用いることも可能である。この二つの例文から、野球のバットのような細長い道具を介在させないスポーツ（バスケットボールのシュート、バレーボールのシュートなど）でも「本」が使われることをうまく説明する。この拡張を動機づけるのは、細く長いものについての知識体系であるイメージ・スキーマを別のものに投射するというイメージ上の変換操作である。（長細いもののスキーマ ⟷ 軌道のスキーマ）これをイメージ・スキーマ変換（image-schema transformation）と呼ぶ。（河上1996:49）

３．１．３　語彙項目とカテゴリー化

Langacker（1987）の認知文法では、プロトタイプ[9]に基づくカテゴリー化[10]とスキーマに基づくカテゴリー化のどちらも自然言語の合理的な記述に不可欠であると見なされている。前者はプロトタイプから拡張を動機づける類似性を発見する能力が要求され、後者はより特定化されたものとのスキーマ（共通性）を抽出する能力が要求されるとしている。

３．１．３．１　プロトタイプに基づくカテゴリー化

プロトタイプに基づくカテゴリー化は対象Ｘがプロトタイプからの拡張として捉え、破線矢印“⇢”で表示する。

３．１．３．２　スキーマに基づくカテゴリー化

スキーマに基づくカテゴリー化は対象Ｘをスキーマの具体化として捉えられ、実線矢印“⟶”で表示する。

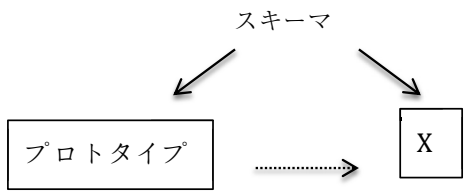

図１　プロトタイプ に基づくカテゴリー化とスキーマに基づくカテゴリー化　　―河上（1996：71）

３．１．４　文法化（grammaticalization/grammaticization）

「文法化」について、Hopper & Traugottは以下のように定義する。

> 文法化とは、語彙的な要素が特定の用法において文法的要素になったり、文法的な要素がより文法的になったりするという、言語変化の一種である。（Hopper and Traugott 1993:2）

例えば：日本語の「…という…」という表現はもともと本動詞「言う」から発達したと考えられる。「言う」は内

9　プロトタイプとはカテゴリーの最も典型的な成員の持つ特徴の抽象的合成物もしくは集合体を言う。

10　カテゴリー化とは事物からなんらかの類似性や一般性を抽出することで、事物間にあるまとまりを認識し分類することである。

容語だが、「…という…」はひとかたまりの機能語となっていく。「雨が降るという予報」や「あなたという人は！」等の用法は本動詞的意味以外への拡張がなされている。

３．２　コーパス資料の紹介

本論文が用いているデータは北京外国語大学日本学研究センターが開発した中日対訳コーパスを通して抽出した。具体的な手順は、まずある文学作品を選定し、本文にキーワードが含まれている文を抽出し、抽出したデータの中から適切な例を取り出し、分析を行った。対訳のコーパスから抽出した資料であるので、すべての原文に訳文が付いており訳文を通すことで、各意味において、“什么”と「何」が対応するかどうかを示すことができると考えた。

ここで中国語原文の小説として劉心武が1984年に書いた《钟鼓楼》(『鐘鼓楼』) と浩然が1975年に書いて1994年に出版された《金光大道》(『金光大道』) を選定する。

３．２．１　“什么”のデータ資料と意味分類

《钟鼓楼》(『鐘鼓楼』) は劉心武が1984年に書いた小説である。その内容としては主に北京の鐘鼓楼あたりで起きた、様々な人物と社会場面を通して当時北京市の市民の生活状況を描写した物語である。浩然《金光大道》(『金光大道』) は中国建国後に土地改革を行ったことを背景にして、当時の農村生活を描いている。今回はこの二つの小説に出た“什么”を対象に研究を行いたい。

先行研究において、“什么”には様々な意味があることが示された。石 (2010) が述べたように、多くの言語の疑問詞には「疑問」、「不定」と「任意のすべて」の意味が含まれている。呂 (1978) は「疑問」と「不定」の意味を提示し、朱 (1982) は「疑問」と“周遍性”(任意のすべて) の意味を提示している。守屋 (1995) も同じく「疑問」「不定」と「任意のすべて」の意味を提示した。王 (2012) も中国語の不定語の意味に関して「全称量化 (任意のすべて)」、「存在量化 (不定)」と「疑問解釈 (疑問)」に分けて分析を行った。邵 (2014) は“什么”の非疑問用法に注目し、「全指 (任意のすべて)」「虚指 (不定)」にも言及した。

本論文では“什么”の意味に関して、以上の先行研究で言及した「疑問」、「不定」と「任意のすべて」という３つの意味を基に、他の意味にも言及する。先行研究において説明しているすべての意味を整理すると、以下の表になる。

以上の先行研究のまとめからわかるように、中国の“什么”の研究においては「疑問」「不定」「任意のすべて」の他に、「借指」、「否定」、「例指」、「感嘆」の用法が挙げられている。そこで、本研究では“什么”のデータ資料を「疑問」、「不定」、「任意のすべて」、「借指」、「否定」、「例指」、「感嘆」の７つに分ける。

表 iii　本論文で定義した“什么”の意味と先行研究の説の対応

意味	先行研究においての説明
疑問	呂(1987)指示詞:疑問　代名詞:疑問　朱(1982)疑問：所属を要求する、性質を要求する　守屋(1995)疑問　木村(2012)属性への疑問、個体指定　石(2010)疑問　王(2012)疑問解釈
不定	呂(1987) 指示詞：不明確な事物・人を指す　代名詞：不明確な事物にかえて用いる　守屋(1995)不定　邵(2014)虚指　石(2010)不定　王(2012)存在量化
任意のすべて	朱(1982)周遍性　呂(1987) 指示詞：不定　代名詞：不定 守屋(1995)任意のすべて　邵(2014)全指　石(2010) 周遍性　王(2012)全称量化
借指	朱(1982)：名が分からないもの、言えないことを指す　邵(2014)：借指
否定	呂（1978）：否定　邵(2014)：否定　反訣
例指	呂（1978）：列挙　朱(1982)：列挙　邵(2014)：例指
感嘆	呂（1978）：感嘆(驚き)　邵(2014)：独用

３．２．１．１　疑問の意味を表すデータ

“什么”が「疑問」の意味を表す場合、先行研究からも分かるように、主に「属性への疑問」と「個体指定」に分けられる。“什么”が疑問を表す意味の文の代表例を以下の表に挙げる。

まずは「属性への疑問」の例で、“什么”が直接に疑問主体に当てはまるか、あるいは“什么”の後に付いている名詞に関する疑問であるかである。具体的には以下の通りである。

中国語の原文	訳文
说实在的，她不太理解他。他的内心里究竟都装着些什么？	じつのところ、彼女には、父(のことは)、よく分からなかった。父が心の中で何を考えているのか見当がつかなかった。
什么是翻身，什么是幸福呢？	解放とは何か、幸せとは何か。
你是谁呀？你到这儿干什么来了？	あんたは誰かね。何しに来たんかね。
小磊子的对象是你啊，你叫什么名儿？	ああ、小磊の彼女があんたかね。なんという名前だね。
他是谁？什么人？	男は、どこのどいつだ、言え！
慕樱家里都养了些什么花？	慕桜の家ではどんな花を育てているか？

以上の例文で大まかに４種の形がある。前の３つの例文では“什么”が直接に対象語になり、後ろの３つの例文は主に「“什么”＋名詞」の形で出現している。両方共“什么”が代表するものへの疑問を表し、その具体的な内容への解釈が要求されている。

次に、「個体指定」の例に関して、発話者は問題を提出後、何かの範囲を直接出して、答えはその範囲の中にあることを示している。具体的には以下の通りである。

中国語の原文	訳文
他是什么出身呢？学生，工人，农民，解放军。	何の（どこの）出身だろう(どんな立場の人だろう)？学生、労働者、農民、それとも解放軍か。
那什么滋味？下放！劳改！批斗！检查！	どんな目にあったと思う？“下放”、労働改造、吊るしあげ、それに“検査”よ。

最初の例文の通り、“什么出身”(「何の出身」) に対して後ろの文脈に“学生、工人、农民、解放军”の範囲が出されてあり、その中に答えがある。

以上が、「属性への疑問」と「個体指定」の二つの方面で形成された“什么”が疑問の意味を表す場合である。

３．２．１．２　不定の意味を表すデータ

“什么”が「不定」を表す時は、意味上は日本語の「何か」に似ており、文中の指示対象のグループに不確定な対象が存在するということを表す。代表例を以下に挙げる。

中国語の原文	訳文
刘祥刚要说什么，猛听背后一串自行车的车铃响，就收住话，一边朝路边躲，一边扭头去看。	劉祥は何か言おうとしたが、後ろでけたたましく自転車のベルが鳴ったので、道ばたによけて振り向いた。
她真希望那鞋有什么毛病，然而那双鞋偏新得令人遗憾。	彼女は自分の靴のどこかが壊れていたらいいな、と思ったが、靴は憎らしいほど真新しかった。
我先去啦。您有什么话要我捎回去吗？	じゃ、ひと足お先に参ります。何か言づけはありませんか？おじさん。
怎么啦？有什么事吗？	どうした。何か用事かね。
可不许扎到什么地方去死睡。	どっかへへたりこんで寝ころんだりするなよ。

以上の例のように、対象は具体的に何なのか、幾つあるかは明確に分からない際に、“什么”を用いてその不明確な対象を指す。

３．２．１．３　「任意のすべて」の意味を表すデータ

“什么”が「任意のすべて」の意味を表す時は、ある特定の範囲内のメンバー全員を指している。構文上は“也(も)”或いは“都(すべて)”と一緒に出現することが多い。(破線の語は“什么”が「任意のすべて」を表す時に同じ文によく出る語である。) 以下は中国語原文のコーパス資

中国語の原文	訳文
他是个细心的人，干什么都细心认真。	彼は何ごとにもよく気がつき、まめで、まじめだった。
什么也不如学一身本事，长一身力气，咱们就凭它慢慢熬日子。	要するに、手に職つけてよ、どこさ行っても喰いっぱぐれねえようにして、あとはじっくりやっていくのよ。
想说什么就说什么，什么高兴就说什么。	ただ言いたいことを言い、気のむくままに言えばいいのだ。
头一条她最爱夸张，什么事情经她嘴里一说，不夸张十倍以上绝不罢休。	一番困るのが針小棒大に言うことである。どんなことでも彼女の口を通すと、十倍以上は誇張して話す。
你呀，不论对待什么事儿，总比别人想得多。	あんたっつう人は、だいたいが考えすぎんだよ。

料からの例である。

最初の例は“什么”と“都”が一緒に出る文で、次の例は“什么”と“也”が一緒に出る例である。三番目の例文は同一の例文に“什么”が前後照応に出て、後者の“什么”は前者の“什么”のすべてを代表している。最後の例文は構文上の標がなく、文脈の意味からある範囲のすべてを指していることがわかる。

３．２．１．４　例指（或いは列挙）の意味を表すデータ

“什么”が例指の意味を表している時には、“什么”の具体的意味はその同位語の集合或いは同位語と似ている語の集合である。（破線の語は“什么”の同位語である。）

以下にコーパス資料からの抽出例を挙げる。

中国語の原文	訳文
“文化大革命”中因为“京剧革命”革掉了小生小嗓这个行当，他便在“样板戏”中充当零碎杂角，演个村民甲或匪军丙什么的。	「文化大革命」が進行する中で「京劇革命」となり、二枚目の役柄も切り捨てられてしまったので、「模範劇」の中で、村民甲あるいは敵軍内とかいった端役をやるしかなかった。
就算在我们那个破单位当上了主任什么的，又怎么能管到老韩这儿来？	今いるあんなちっぽけな部門で、主任とかになったところで、韓さんのところにまで手が届きやしませんよ。
这位“詹姨”竟如此无礼！什么“死胡同”、“拐跑”——多不吉利的言辞！	まあ、なんて失礼な。“行きどまり”だの、“さらう”だのって、縁起でもない。
他从来没想过他要有什么个人的事业！	個人の仕事など考えてみたこともなかった。

以上の例を見て、“什么”の同位語を簡潔に英文字“x、y、z”で表記すると、“什么”が例指の意味を表す時に主に「x、y、z+“什么的”」、「x+“什么的”」、「“什么”+x、y、z」、「“什么”+x」という４つの形になる。いずれにしても、“什么”の意味はその同位語が属するグループを代表し、一種のものの集合を表している。

３．２．１．５　否定の意味を表すデータ

“什么”が否定を表す場合、文構造上は疑問文と同じである。しかし、発話者の意図から分析すると、このような「疑問文」への答えは存在しておらず否定の意味を表す。中国語原文の小説から、以下のデータを抽出した。

中国語の原文	訳文
稿子？这十来年咱们什么时候扔过稿子？你那书架底下的柜橱里，不全是稿子吗？	原稿ですか？十年このかた、原稿を捨てちゃいないでしょ？あの本棚の下の段に原稿がいっぱい入ってるじゃありませんか。
装什么假正经哟！谁不想开开心，乐一乐？	何もそう深刻ぶることないでしょ。誰だって面白おかしく楽しみたいはずだわ。
你们这些精神鬼，不好好睡觉，闹什么呀？	この腕白どもは、まあだ寝ないで、何騒いでんだ？
什么雷达！外地杂牌货！二嫂走后门买来的，说是内部试销的新产品，六十块钱。	うそよ。ラドーなんかじゃないわ。国産の安物よ。下の兄嫁が裏口で買ってくれたの。内輪でテスト販売した新しい製品でね、六十円よ。
别看了，自己写的，还看什么。	もういいだろ？自分で書いたもんだろ、見たってしようがねえ。

以上の例文のように、“什么”が否定の意味を表す場合、反問、非難等の感情も含み、発話者の否定的な感情を表すことが分かる。

３．２．１．６　借指の意味を表すデータ

“什么”が「借指」の意味を表す時にはある不明なものへの指示、または複雑なもの等を簡潔に指し示し、ある程度「某」と共通性を持っている。中国語原文の小説から、以下のデータを抽出した。

中国語の原文	訳文
都是刚才那个庞什么把你搅的吧。	あの庞さんって人が来たせいでしょう。
李铠非常清楚，卓文君所钟情于司马相如，究竟是些什么……	卓文君が司馬相如の何に惚れたのか、彼にはよく分かっている。
这屋里有镜子，我常照，我知道我自己什么模样。	ここには鏡がある、よく映して見るんだがね。自分のお顔がどんなものか、よく心得ているつもりなんだよ。
她翻过一通以后，便懂得了什么叫专题集邮——齐壮思所列的专题真有意思。	一通り見終わると、テーマ・コレクションとはどういうことかも分かった。斉壮思のテーマはなかなか面白い。

例文のように、“什么”が代表している内容は副次的で、複雑であるいは不明である場合に具体的な指示内容が文脈上には出現しておらず、代わりに疑問詞を用いてそのいい言い難い内容を指示していることが分かる。

３．２．１．７　感動詞としてのデータ

“什么”が感動詞として用いられる場合、名詞と異なり、意味論的意味は持っていないが、発話者の感情を表す。

具体的には以下の例がある。

中国語の原文	訳文
什么？不知道？凭什么不知道？！怎么可以不知道？！	え?知らないって?どうして知らないの?知らなくていいの?
什么什么？棉花籽也能吃？	へええ。綿の実、食べられるの？
什么，我不让他们懂？我反对抗美援朝？我反对工农联盟？	なに！おれがわからせようとしねえ？おれが抗米援朝に反対し、労農同盟に反対したのか？
什么，你同意分开？	なに？おめえが分家に同意した？

以上の例文のように、“什么”が単独的に用いられ、意味論的意味を持たない場合、前後の文脈から発話者の驚き、非難等の感情を示していることが分かる。

３．２．１．８　“什么”の意味のまとめ

“什么”が出現したコーパスの例文を整理し、以上の７つの意味に分けた。各意味の分布を明らかにするために、以下のようにまとめている。

表 iv　『鐘鼓楼』と『金光大道』において“什么”の各意味の分布

意味	疑問	不定	任意のすべて	借指	例指	否定	感嘆
出現回数	279	103	178	152	60	116	9
出現頻度	31.1%	11.5%	19.8%	16.9%	6.7%	12.9%	1.0%

表ivから分かるように、“什么”が疑問の意味として出現した回数が279回であり、出現頻度は31.1％と、すべての意味において一番高い比率を占めた。上述の先行研究においても“什么”の「疑問」の意味が基本的な意味と定義されていることから、本論文でも「疑問」の意味を“什么”の基本的意味と認定した。他の意味の出現頻度はそれぞれ10％～20％までの間にあるが、「感嘆」という意味は、その出現頻度が非常に低いこと（1.0％）が示された。

第４章　“什么”の認知意味論的分析

河上（1996）によると、一つの語彙項目が一つの意味しか持たないということは少なく、大部分の語彙項目は複数の意義をもっており、それらの意義はネットワークを形成して、複合的なカテゴリーを形成していると定義している。また、Langackerはプロトタイプとスキーマの概念を用いて、多義語の様々な意義を関係づけている。

よって、本論文では続いて、認知言語学の理論を用いて中国語疑問詞“什么”の意味ネットワークを構築することを試みる。

前節で述べたように、“什么”には「疑問」、「不定」、「任意のすべて」、「借指」、「列挙」、「否定」及び「感嘆」の７つの意味があるが、同じ“什么”の異なる意味には、何らかの関連性があると見られ、その抽象的な関連性を意味ネットワークを用いて具体的に構築することが本章の目的である。

本論文においては、石（2012）等の“什么”の基本的な意味を「疑問」と考える観点を支持し、また本研究の調査においても「疑問」の意味の使用頻度が一番高いことが示されたことから、本章での分析においても、「疑問」を“什么”のプロトタイプ的意味であると考えて、他の意味は「疑問」から拡張した結果であると仮定した。以下は「疑問」から他の意味への拡張過程を示したものである。

４．１　プロトタイプ的意味―疑問

まず、“什么”が「疑問」を表す際の意味を分析するため、「疑問」の意味を「属性への疑問」と「個体指定」に分けた。「属性への疑問」とはある特定のものに対して疑問を示すことである。「個体指定」とは対象がどれかは分からないが、文中で示している範囲から選択することである。具体的には以下の例がある。

（35）　他是谁？什么人？（男は、どこのどいつだ、言え！）［属性への疑問］

（36）　他是什么出身呢？学生，工人，农民，解放军。（何（どこ）の出身だろう／どんな立場の人だろう？学生、労働者、農民、それとも解放軍か。）［個体指定］

（35）の例文は「属性への疑問」で、“什么”は人を修飾していて、この人の性質などを尋ねている。このような場合、答えは単純に指定ではなく、具体的な内容を説明しなければならない。（36）の例文は「個体指定」で、“什么”が彼の出身（立場）を聞いているが、すぐ後に選択肢が出されており、答えがその中から選択できる。この二つの意味を図で表すと以下の通りになる。

図２「属性への疑問」

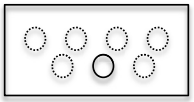

図３　「個体指定」

両方とも１つの対象について質問しているのだが、焦点が多少異なる。前者は対象に集中しその内実（内容、属性）を尋ねるのに対して、後者は対象が集合においてどれに当てはまるかを聞いている。図２において実線の丸は疑問対象（男）を示しており、「？」は疑問マークで、この対象に疑問を持っているという意味を表している。

図３の枠は（36）の文に出現した学生、労働者等の選択肢の集合で、破線の丸は問題に当てはまらない選択肢、実線の丸は問題に当てはまる選択肢、つまり個体指定の対象であることを意味している。

４．２　イメージ･スキーマ変換（個体－不特定－集合の変換）

まずは「疑問」の下に属する「個体指定」から「不定」への拡張を分析してみる。「個体指定」と「否定」の意味を表す際の例文を以下に示す。

（37）　怎么啦？有什么事吗？（どうした。何か用事かね。）

（37）の例文は「不定」で、“什么”は後ろの名詞“事”（用事）の中の幾つか（確定できない）の対象を指している。

「不定」とはある範囲の中から不特定の対象物を指しているということを意味しており、前文で述べている「個体指定」と比較すると「不定」とある程度似ていることが見て取れる。「個体指定」とは集合の言い方の通り、指示範囲から個体を指定することである。それに対し、不定とは指示範囲から不特定のものを指しており、集合（枠で示す）の概念を用いて考えると、以下の図で表すことができる。

図４「個体指定」→「不定」

左側の図は「個体指定」の意味の図であり、枠は集合を代表している。実線の丸は指示対象を示しており、破線の丸は同じ集合に属しながら指示対象に当てはまらないものを示している。右側の図は「不定」の意味の図で、枠は指示対象になる可能性があるものの集合（例文においては来た理由）である。「個体指定」とは違い「不定」の場合、その具体的な指示対象はいくつ存在しているか分からず、どれに当てはまるかも定かではない。このような不確定性を表す為に、枠の中にはすべて破線の丸で表した。図４で示しているように、２つとも指示対象はある範囲に存在するが、具体的に区別できるかどうかによって意味が異なる。「個体指定」の場合は明確な選択肢があり、指示対象は１つしかない。これに対して「不定」では明確な選択肢が存在せず、指示対象が複数存在する場合や存在しない場合もある。このような類似性を鑑み、「個体指定」から「不定」への意味拡張は、イメージ･スキーマの変換であると捉えられる。

次に、「任意のすべて」の意味はどのような変換を経て拡張したのかを、以下の例文を用い分析した。

（38）　头一条她最爱夸张，什么事情经她嘴里一说，不夸张十倍以上绝不罢休。（一番困るのが針小棒大に言うことである。どんなことでも彼女の口を通すと、十倍以上は誇張して話す。）

例文の“什么事情”（どんなことでも）は“所有的事情”（すべてのこと）という意味で、前と同じように集合の観点で理解してみると、ある集合のすべてという意味である。図で表すと以下になる。

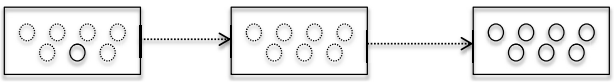

図５　「個体指定」→「不定」→「任意のすべて」

図５において、枠は集合の意味であり、実線の丸は“什么”の指示対象であることを示している。「任意のすべて」の意味を表す際は、指示対象が集合の全体であり、前の「個体指定」（図３）と「不定」（図４）と比較し、指示対象が少ないほうから増えていき最後に全員に成る過程をとる。図で表すと以下の通りである。

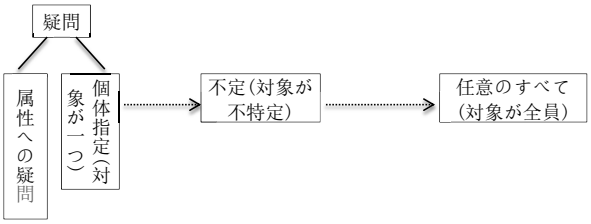

図６　“什么”の「疑問」「不定」と「任意のすべて」の関係

本論文では、石（2012）による疑問詞の３つの意味の関係について、図６で示すように、指示対象が１つから不特定へ、不特定から全体への変換であると考える。

４．３　意味拡張

前で述べた３つの意味以外に、「例指」、「否定」、「借指」と「感嘆詞」についての相互関係も分析したい。

まず、“什么”が「例指」の意味を表す際に、文中に同位語があり、“什么”はその同位語が属している同類物のグループを代表している。例は以下に示すとおりである。

（39）　这位“詹姨”竟如此无礼！什么“死胡同”、“拐跑”——多不吉利的言辞！（まあ、なんて失礼な。“行きどまり”だの、“さらう”だのって、縁起でもない。）

（39）の例文で“什么”が表しているものはその同位語“死胡同”、“拐跑”（「行きどまり」「さらう」）のような縁起が悪い一種の言葉の集合である。図で表すと以下になる。

図７　「任意のすべて」→「例指」

右側の枠は縁起が悪い言葉の集合を表し、黒の丸は“死胡同”、“拐跑”(「行きどまり」「さらう」) 等縁起が悪い言葉を表す。右側の枠を見ると左の枠(「任意のすべて」) と似ており、「任意のすべて」を表す時には以下の例が挙げられる。

(38)　头一条她最爱夸张，什么事情经她嘴里一说，不夸张十倍以上绝不罢休。(一番困るのが針小棒大に言うことである。どんなことでも彼女の口を通すと、十倍以上は誇張して話す。)

(38) と (39) の例文からも分かるように、「例指」の場合は“什么”が表している集合に属するもの (「行きどまり」「さらう」) が文中に存在する。「任意のすべて」の場合は“什么”が表す集合はどういうものか (38の例で「こと」の集合) を述べているだけで、その集合の具体的な内容については言及していない。前述のように、両方ともある集合のすべてを表すという類似性に基づき、「例指」は「任意のすべて」の特殊な一種類であると考えられる。意味拡張理論のシネクドキー理論は「より特殊な意味をもつ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩」という意味を持つものであり、「例指」と「任意のすべて」と類似している。ゆえに、「例指」は「任意のすべて」の特殊な意味をもつ形式で、シネクドキーを通して拡張していると考えられる。

次に“什么”が「否定」を表す際には、文構造は疑問文と似ている場合が多く、発話者の態度は否定的である。以下がその例である。

(40)　你们这些精神鬼，不好好睡觉，闹什么呀？(この腕白どもは、まだ寝ねえで、何騒いでんだ？)

(40) は“闹什么”(何騒いでんだ) と聞いているが、発話者の立場から考えると「なに」に当てはまる答えは存在しない。

図８　「不定」→「否定」

発話者にとって、「何騒いでんだ」の含意は「騒ぐ理由がない」ということで、即ち「騒ぐな」という意味である。つまり、「否定」を表す場合、発話者にとって、「なに」という集合に当てはまるものは存在していない。前で述べた「不定」の意味は集合内に対象は存在しない場合、１つ存在する場合または複数存在する場合などが考えられ、集合の立場から見ると、「否定」は「不定」のある特殊な１種類であると考えられる。ゆえに、「否定」は「不定」からシネクドキーを通し意味拡張していると考えられる。

また、「借指」とは“什么”を用いてある特定の事物を代表している。例文は以下の通りである。

(41)　都是刚才那个庞什么把你搅的吧。(あの庞さんって人が来たせいでしょう。)

(42)　李铠非常清楚，卓文君所钟情于司马相如，究竟是些什么……(卓文君が司馬相如の何に惚れたのか、彼にはよくわかっている。)

(41) の例文“庞什么”(庞さんっていう人) の“什么”は庞さんの下の名前を表していて、名字の“庞”と結合し特定の人を指している。(42) の例文の“什么”は卓文君が司馬相如に惚れた原因などを表し、簡潔に彼がそれを分かっているということを表している。以上のように、何かの原因 (具体的な内容が分からない、名が思い出せない、ぼかしていう必要がある、内容が長くて簡潔に指示する必要がある) で、具体的な内容を述べる代わりに“什么”を用いてそれを指示する。このような場合、「疑問」の「属性への疑問」と似ていると言える。

(35)　他是谁？什么人？(男は、どこのどいつだ、言え！) [属性への疑問]

(35) は「属性への疑問」の例で、“什么”は発話者が知りたい内容を指している。(39) (40) の「借指」の例文と対照してみると、“什么”は両方とも何か特定のものをさしている。この二つの意味を図に表すと、以下の図９になる。

図９　「属性への疑問」→「借指」

図２で実線の丸は対象である特定のもの (例文では男のこと) を指しており、「？」は対象が不明確であることを表している。図７も同じように実線の丸は対象である特定のものを指しており、実線の丸の中を斜線で示すのはその内容は何かの原因で直接的に示してはいないが明確であることを示すためである。このように、両方とも特定の対象 (35の例においては男、41の例においては庞さんの下の名前、42の例においては具体的な原因) を指している。両者とも対象を言語化できないという類似性があるので、本論文では“什么”の「借指」は「属性への疑問」の意味からメタファーを通して形成していると考える。

４．４　文法化

最後に“什么”が感嘆詞として用いられる場合、代名詞や副詞などの意味が存在しない。しかも、単独に用いられる場合が多く、発話者の感情を表すので、典型的な文法化であると判断する。

(42)　什么什么？棉花籽也能吃？(へええ。綿の実、食べられるの)。

この文の訳文からも分かるように、“什么”が対応するものは名詞ではなく「へええ」という意味の感嘆詞に拡

張している。

以上７つの意味関係をまとめて、以下の図で表す。

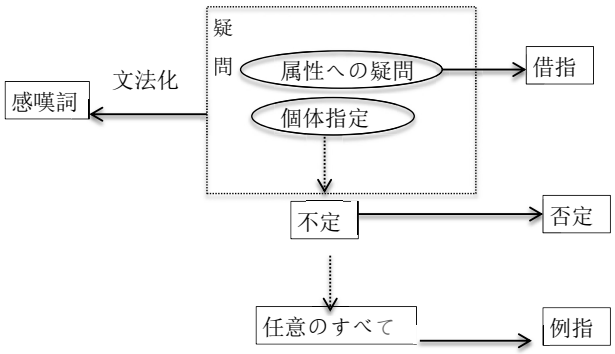

図 10“什么”の意味ネットワーク

図10で示すように、“什么”のプロトタイプ的意味は「疑問」であり、「疑問」は「属性への疑問」と「個体指定」に分けられる。「疑問」「不定」と「任意のすべて」という３つの意味は対象物が１つから不確定へ、不確定から全体までの拡張経緯である。本論文ではこの流れをプロトタイプ事例から拡張していく経路であると考えている（破線矢印で示す）。「例指」と「否定」はそれぞれ、「任意のすべて」と「不定」からシネクドキーを通し拡張していると考えられ、「借指」と「疑問」は類似性を持っていて、前者が後者からメタファーを通して拡張していると考えられる。最後の感嘆詞の場合はもともとの意味機能を失ってしまう文法化の過程であり、単に発話者の感情を表す感嘆詞になっていると示唆される。（シネクドキー、メタファーと文法化の拡張経緯を実線矢印で示す。）

以上で示したように、中国語の“什么”のプロトタイプ的意味は「疑問」であり、そこから拡張し様々な意味になっていることが示された。

４．３　まとめ

以上の論文では、７つの意味「疑問」「不定」「任意のすべて」「借指」「否定」「例指」「感嘆」に分けられた“什么”を、第３章で収集した例文を通し具体的に各意味の内容を分析した上で、認知言語学の理論を用いて意味間の関連を見出した。これらの関連を通して、“什么”の意味ネットワークを構築した。意味ネットワークは図10で示された通りである。

第５章　終章

５．１　終わりに

従来、“什么”の構文上の特徴について分析した研究は多く見られるが、認知言語学的観点からの分析が不足していたため、本稿は認知意味論の立場から、まず、辞書の記述及び先行研究の知見を踏まえ、“什么”の意味分類を再考した。次に、データを通し、具体例を分析することによって、各意味の特徴を図式化した。最後に、各意味間の繋がりを考察し、意味ネットワークにまとめた。

本稿の分析によって得られた、“什么”の各意味間関係を図10にまとめた。まず、“什么”のプロトタイプ的意味は「疑問」であることが示され、また、「疑問」から「不定」と「任意のすべて」への経路は対象物が１つから不確定へ、不確定から全体までの拡張経緯であることが示された。「例指」と「否定」はそれぞれ、「任意のすべて」と「不定」からシネクドキーを通し拡張していると考えられ、「借指」と「疑問」は類似性を持っており、前者が後者からメタファーを通して拡張していると考えられる。最後に、感嘆詞の場合はもともとの意味機能を失ってしまう文法化の過程であり、単に発話者の感情を表す感嘆詞になっていると推測される。

叙述のように、“什么”の各意味はプロトタイプ的意味から拡張したと考えられ、その拡張経路をよく理解することで、各意味が一つのシステムとしてまとまり、より簡単に学習できると考えられる。

５．２　今後の課題

本稿では“什么”と“都”の連用については未検討であり、「任意のすべて」という意味を表す際に、“都”の機能についてより深く考察するべきである。また、「否定」の意味を表す際に、語用論との関わりからの分析も必要だと考えており、“什么”と似ている疑問代名詞が“什么”と同じように使用できるかについても検討が必要であると考える。

参考文献：

中国語文献

吕叔湘（1978）《现代汉语八百词》北京:商务印书馆 pp.483-485

吕叔湘（1985）《现代汉语指示代词》上海:学林出版社

邵敬敏（2014）《现代汉语疑问句研究（增订版）》上海:华东师范大学出版社pp.352-372

石毓智（2010）＜第十三章疑问代词和疑问语气词＞《汉语语法》上海:商务印书馆

王海峰 王铁利（2003）＜自然口语中“什么”的话语分析＞《汉语学习》2003（04）

战庆胜（1997）＜汉日疑问代词意义的比较＞《日语学习与研究》pp.68-70

朱德熙（1982）《语法讲义》北京:商务印书馆 pp.89-94

日本語文献

河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』東京：研究社

木村英樹（2012）「疑問詞の意味機能—属性記述と個体指定」『中国語文法の意味とかたち—「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究』東京：白帝社 pp.115-132

松本曜（2003）『認知意味論』東京：大修館書店

籾山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』東京：研究社

守屋宏則（1995）『やさしくくわしい中国語文法の基礎』東京：東方書店 pp.81-85

【英語】

Lakoff, George.1987.*Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: The University of Chicago Press[池上嘉彦・河上誓作他訳.1993『認知意味論』東京：紀伊国屋書店]

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of cognitive grammar*, Vol.1. *Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

辞書

北村正光（1977）『現代漢語詞典』東京：龍溪書舎

中国社会科学院语言研究所（編）（1998）《现代汉语词典》上海：商务印书馆

例文資料

北京外国語大学日本学研究センターが開発した中日対訳コーパス

中国語：劉心武（1984）『鐘鼓楼』　浩然（1975）《金光大道》

A Cognitive Semantic Analysis of the Relationships Between the Meanings of “shenme”

Yang Weijian

There are many studies that have analyzed the syntactic features of " 什 么 ", but analysis from a cognitive linguistic point of view is in short supply. In this paper, " shenme " was analyzed using the framework of cognitive semantics, and the semantic classification of " shenme " was reconsidered based on the description of the dictionary and preceding research. In addition, the features of each meaning was schematized by analyzing concrete examples using the "Chinese-Japanese bilingual corpus", and the connection between each meaning was examined and compiled into a semantic network. Through the analysis of this paper, the semantic expansion process of " shenme " and the relationship of each meaning are clearly shown through the semantic network.